

ユメコネクト⑤

みぬけ！ かく隠されたしんじつ真実！

なる い つゆまる
成井露丸・作

くずもち・絵



アルファポリスきずな文庫

もくじ

プロローグ また、この夢 6

① 始まる、試験シーズン！ 13

② エグゼ・フォン・スメラギ 22

③ 数学はやっぱり苦手です 31

④ 点数バトル、成立！ 40

⑤ 種まきの違和感と、帰り道 58

⑥ はじまる、お泊まり勉強会 67

⑦ 近すぎる距離と、遠すぎる月 79

インターロード NUNにいるのに 92

⑧ プレテストだよ！ 103

⑨ 和田先生の異変 109

⑩ 保健室のホワイトボード 118

⑪ 決戦は金曜日 131

⑫ 夢の中の教室——キマイラ登場！ 148

⑬ 斬れない剣 158

⑭ 森の木漏れ日とリヒトヴェーラ 167

⑮ 戻ってきた日常と、中間テスト 176

⑯ 文芸部室、放課後 193

⑰ 星ヶ丘、夕陽の下で 210

エピローグ 218



エレナのパートナー
にしてクールな「黒
の騎士」。

ほるか ぜん せ すた
遙香の前世の姿!
まもの たいじ
魔物を退治して
いる「白の騎士」。

ぜん せ
エレナの前世の
ごん やくしゃ こめり
婚約者。氷の
まじゆつ つか
魔術を使う。

ほるか おさななじみ じつ ぜん
遙香のイケメンな幼馴染。実は前
せ から ほるか こん かい ほるか
世から遙香のパートナー! 今回遙
香と点数対決をすることに!?

ぜん せ ほるか こん やくしゃ
前世は遙香の婚約者。
べんきょう とく い
勉強はとても得意。

リリアンヌ・
フェルシュタット

エレナ・
ローゼンマイヤー

シャリフ・
アイスウィンド

み どう せん せい
御堂先生

やさ せん せい え
優しい先生だけど、絵が
とっても独特。

ひの
火野
まき
真姫那

き じ
木辻
ゆい
唯

ぶん げい ぶ こう かい ころ
文芸部の後輩。この頃
ふ しぎ 夢の み
不思議な夢を見ている。

ぶん げい ぶ こう かい
文芸部の後輩。おっとり
やさしく、頼りになる。

きり かい と
桐島
海斗

ひりやう
氷河
理人

ゆめ ほん か
結女
遙香

登場人物

西野京子

うんどう とく い さん すう
運動が得意! だけど算数は
にがて ちゅうがくに ねんせい ゆめ
苦手……な中学二年生。夢の
なか
中では「エレナ」だけど……?

ほるか しん ゆう かい と ほるか
遙香の親友。海斗と遙
香が大好き!

プロローグ また、この夢

草原を抜けて吹き上げる風が、頬を撫でる。木の葉や草を揺らし、ざわめきを作っている。魔力の揺らぎを通して、森の中の動物や魔物たちが落ち着きのない声を上げているのが遠くから聞こえた。

森の向こうがわに、野宮の煙がもくもくと上がっているのが見える。

王国の兵士たちが、そこまでやってきているのだ。

ふと、足元に気配を感じて視線を落とす。すると、一頭の仔山羊がうずくまっていた。

白い毛並みは泥に汚れていて、細い足にはまだ新しい傷あとが残っている。

きつと王国の兵士に傷つけられて、森から逃げてきたのだろう。

仔山羊は弱々しく鼻先を私のひざに寄せて、琥珀色の目を細めた。

「大丈夫。もう大丈夫だよ。私がいるから」

そつと膝をついて、仔山羊の首筋に手を添える。

指先から、赤い光が流れ出して、やわらかく、壊れかけた命を包み込むように広がっていく。

この子たちに与えられるのは、魔女の恩恵だけ。炎を司る南の魔女として与えられる力だけ。

仔山羊の毛並みが、少しずつ白さを取り戻していく。

こわばった表情が、穏やかになっていく。

そつと手を離れた。

傷が完全に癒えたわけではない。



本当なら、もう少しだけ魔力を注ぎたかったけれど、この力は与えすぎではいけないのだ。
与えすぎると――

やがて、仔山羊がゆつくりと立ち上がった。
傷が治ったことを喜んでみるみたいだ。
それを見て、私はちよつと嬉しくなる。

――世界はみんなのためにあるべきなのだ。

そんなことを語っていた魔法学校のころの自分を思い出す。

人間だけが大地を支配するのではなく、動物も、精霊も、魔物も、すべてが共に暮らせる場所にした。けれど、そんなことを言っても多くの人には世迷い言だとか、綺麗事だとか言われて、取り合ってもらえなかった。

それでも友達になら言えた。

ラファイエラ・ソーンダイク――今は東の魔女となった年上の親友。

最後までわかっではもらえなかったけれど。

彼女も今では、ちやつかり王国側の人間だ。

耳を澄ます。森の向こうから、鎧の音が響いてくる。

蹄の音。旗印の揺れる音。王国の兵士たち。魔力を込めて遠くを見る。

草原の中を駆ける少女たちの姿が見える。

白の騎士エレナ・ローゼンマイヤー、黒の騎士リリアンヌ・フェルシュタット。

親友が遣わした王国側の勇者たちだ。

彼女たちは本当に知ってくれているのだろうか？ この世界の理を。

視線を森の中へと動かすと、兵士たちの方を向いて低く唸る、大きな獅子の姿が見えた。脇腹に矢傷を負っている。その足元を、数匹の蛇がすると草を分けて通り抜けていく。森の奥へ逃げようとしている。

みな、追われてきた子たちだ。

「――大丈夫よ」

遠くにいる動物たち、そして魔物たちに声をかける。

側に立つ大木に立てかけていた魔法の杖を手取る。そしてすこしずつ炎の魔力を込めた。

遠くで兵士たちの鬨の声があがった。仔山羊が私の足元で縮こまる。森の方角から、動物や魔物たちの声も大きくなる。

本当のことを言えば、私だつて争いごとは好きじゃない。みんなで平和に暮らしたい。

「ただどその「みんな」に自分の大切な仲間たちが入れてもらえないなら、抵抗するしかないじゃないか。それでもきつと私や、魔物たち、動物たちはこの森を明け渡さないといけないことになるだろう。そうすれば私は動物や魔物を連れて、南の城へと一歩ずつ撤退していくことになる。」

その先に出口なんてなかったとしても。

「ねえ、ラファイエラ。私は、どうすれば良かったのかな？」

右手の杖の先についたクリスタルの宝玉から吹き上がった炎の魔法が、あふれるように空に向かつてほとばしった――

*

「……私は」

そこで目が覚めた。

薄暗い部屋。見慣れた自分の部屋の天井。カーテンの間から朝の光が細く差し込んでいる。「……また、夢か――」

汗が背中中に張りついている。心臓がどくどくと鳴っている。

寝返りを打つと、枕元の目覚まし時計は六時十二分を指していた。

あの世界の夢を見るようになってから、もう、半年以上経った。

最初は月に一度くらいだった。それが二週間に一度になり、一週間に一度になり、最近では――ほとんど毎晩だ。

見た夢の内容はいつも、すぐに忘れてしまう。だからなんとなくよく似た設定のファンタジーな夢を見るようになっていくくらいだった。

夢の中の私は、いつも同じ人物だった。魔法学校や王城に暮らす魔法使い。鏡の中を見れば、そこに映るのは、自分よりすこし大人びた赤い髪の少女だった。

最近、夢の中の感覚がだんだんはつきりしてきた気がする。夢の中の自分の手の感触。風の匂い。声のかすれ方まで――まるで本当に自分が経験しているみたいだ。

物語の結末は変わらない。王国の兵士たちが襲ってくる。勇者たちがやってくる。私の一番の友達、私のことを理解してはくれなかった。

ううん、もしかしたら理解はしてくれていたのかもしれない。だけど味方はしてくれなかった。

「まじかよ〜」

「もうそんな時期!？」

体育館のあちこちから悲鳴が上がる。私も思わず「うわあ」と声を漏らした。もちろん、中間テストがあること自体はみんな知っているけど、知っているのと実感するのは別なのだ。

改めて先生の口から聞くと、急にリアルになる。

「日程は、再来週の月曜日から二日間です。範囲は各教科の担当から追って連絡がありますが、皆さんに——特に初めての定期考査となる中学一年生の皆さんに、校長の私からも、ちょっとしたアドバイスを——」

中間テストっていうのは一学期の途中で行われる定期考査のこと。

ようするに「ここまでちゃんと勉強していますか?」のチェックだ。

小学校と違って、中学校だとテストの結果が通知表に直撃するから、サボるわけにはいかない。

でも、苦手なものは苦手!

ふと、男子の列の方を振り向くと、男子としゃべっていた海斗と一瞬目が合った。

ほんの一瞬だけで、すつと視線を逸らされる。ステージの方を向いて、何事もなかったみた

いな顔をしている。なんだかちよつと肩透かしみたいな気持ちになった。

ところで海斗は、テストのことどう思ってるんだろう。毎日勉強してるのかな? してなき

そうだな。そういうところは、海斗はきつと、仲間のはず……!

「はるかちゃん。中間テストだね」

となりにいた京子ちゃんが棒読みみたいに、言う。

「そだねー」

私も遠い目で応える。

「勉強できてるー?」

「できてるわけないじゃんー」

「だよねー」

「ねー」

二人で頷き合う。

いやほんとに。勉強できてるわけないじゃん、という話である。

本当にこの二ヶ月は忙しかったんだから! 魔物たちのおかげでね!

四月。新学期が始まったと思ったら、いきなり京子ちゃんが魔物に取り憑かれた。

それをきつかけに保健室の御堂先生からクリスタルのチャームを渡されて、夢の世界に飛び込む力——ユメコネットに目覚めた。前世の記憶とか、白の騎士とか、中学生の日常からはだいぶぶっ飛んだ話だ。

そこからがもう、怒涛だった。人数不足で文芸部が同好会に降格しかけたけれど、一年生の眞姫那ちゃんとか唯ちゃんに加えて、理人くんまで入部してくれて首の皮一枚つながった。この五人に海斗を加えていつもの六人になったって感じ。炎の魔神イフリートや炎の精霊サラマンダーとの激しい戦いを乗り越えて、ユメコネットの世界でも、私と海斗と理人くん——エレナ、リリアンヌ、シャリフの三人のチームが誕生した。

それから、ゴールデンウィークには海辺の街で初めての合宿。

そこで眞姫那ちゃんといこの怜央くんに出会った。病気だったと聞いていた怜央くんが、元氣いっぱいだった。「なんで？」って不思議だったけど、その裏では大魔人アモンが街の人たちからエネルギーを吸い取って彼を生かしていたんだ。花火大会の夜にアモンと戦って、なんとか倒した。でも——アモンがいなくなったことで、怜央くんはまた病氣と向き合わなきゃいけなくなつた。

あの時のことを思い出すと、今でも胸がちくりとする。魔物を倒せば全部解決、なんて単純な話ばかりじゃないことに、私は気づいた。

そして連休が明けたら球技大会。バスケの練習に明け暮れる日々の中で、御堂先生から「南の魔女ミカエラ・ローエの転生者がこの学校にいる」と告げられた。巨大な穴《グランドホール》が体育館に開いて——。現れたのは南の魔女ミカエラ本人。本物の魔女との戦い。体育館にいた生徒たちが次々に倒れていく中で、必死に立ち向かった。最後は私たちの力だけじゃない、謎の光が助けてくれて、なんとか穴を閉じることができたのだ。

——で。

そんな二ヶ月を過ごして、試験勉強をする余裕があつたかと聞かれれば、答えは明白だ。

「なかつたね！ 勉強する時間なんて」

「なかつたねー！」

しみじみ頷き合う。いや頷いてる場合じゃないんだけど。ちなみに京子ちゃんはその間に小説コンテストへの投稿もしたりしているのだ。私の親友、すごい。

そんなココソコ話をしている間に、校長先生のお話は本題へと突入した。

「さて、今日この体育館に集まってもらつたのは、中間テストのお知らせだけではありません」

「お？ なんと？」

「大切なお知らせがあります。皆さんもご存じかもしれませんが、英語科の田村先生が産休に入られることになりました。その代わりとして、本日より臨時の英語教員が着任されます」
体育館がざわつとまった。

テストの時とは違う種類のざわめき。「え、先生？」「どんな人？」って。

「本日より産休代替として英語を担当していただく先生を、ご紹介します」

校長先生が一步前に進み、ステージの袖へ軽く目を向けた。

体育館中の視線がそつちに集まる。

カツ、カツ、カツ。

革靴の硬い音といっしょに、ステージの袖から長身の人影が歩いてきた。

すらりとしたダークネイビーのスーツ姿。

銀色に近い淡い髪が、窓から差し込む朝日を受けて、きらつと光った。

え？ 臨時の先生って……

「はるかちゃん。……あれって」

「うん」



隣で京子ちゃんが呟いたのに頷く。

女子の列から、「かつこいい……」「なに？ ヤバくない？」と、違う意味での小さな悲鳴がもれている。その人が演台の前に立つて、マイクの高さをくいと上に少し直した。そしてゆつくりと、涼しい笑みを浮かべて、口を開いた。

「はじめまして。本日より英語を担当しますスメラギと申します。皆さんと一緒に英語を学べることを、楽しみにしています」

穏やかで、よく通る声。丁寧だけど堅すぎない。

大人の余裕みtainなものが、にじんでいる。

あれつてユメコネクトーム研究所のスメラギさん!?

銀色の髪に、切れ長の目。鋭い青い瞳——、間違いない。

エグゼ・フォン・スメラギ。御堂先生の仕事仲間で、私たちが変身するためのクリスタルを作った人だ。海辺の街で初めて会った時は、海の見える喫茶店でいきなり「エレナ・ローゼンマイヤー公女殿下」なんて呼ばれてびっくりした。

アモンとの戦いでは結界を張ってみんなを守ってくれた、頼れる大人だ。ちよつとキザだけど。

——あのスメラギさんが、英語の先生？

隣の京子ちゃんを見た。京子ちゃんも目を見開いてこつちを見ている。

振り向くと、海斗が「は？」って顔をしているのが見えた。腕を組んだまま、口を半開きにしつつ、眉をぐつと寄せている。その表情は「マジかよ」と書いてあるみたいだった。

スメラギさんはステージの上で、挨拶を終えて穏やかな笑顔のまま体育館を見渡している。

女子はきやあきやあ、男子はそわそわ、先生たちは拍手。

その視線が、ほんの一瞬——私たちのいる場所で、止まった気がした。

ほんの一瞬。にこつと笑って、すぐに体育館全体に視線を戻す。

——今、絶対こつち見たし。

体育館の光は、相変わらず穏やかで暖かかった。初夏の五月の、ただの朝の光。

でも今、ステージの上に現れたスメラギさんの存在が、何かを変えた気がする。

京子ちゃんがそつと、私の腕をつついた。

「……はるかちゃん、あれ、研究所のスメラギさんだよ。知ってた？」

「ううん」

ささやき合う私たちを脇に置いて、壇上では紹介タイムが終わりを迎えていた。

「では皆さん、スメラギ先生をよろしくお願ひします」
校長先生の言葉に、体育館に拍手が響いた。

スメラギさんは——スメラギ先生は、柔らかに一礼して、ステージを下りていった。
どうして、スメラギさんが、星ヶ丘中学校の先生に!?

これはもう中間テストどころの騒ぎじゃないかも!

……絶対、中間テストの方が大事だけど。

② エグゼ・フォン・スメラギ

「御堂先生、いますよねー!？」

待ち切れない昼休みがやってきて、私と京子ちゃんは保健室へと駆け込んだ。

四時間目の数学の授業が終わった後、「中間テストが近づいているからわからないことがあつたら教えるから、質問にきてヨシ!」って、数学の和田先生が言ってくれていたけれど、やっぱり今はスメラギ先生の件の方が気になるのだ。

お弁当箱を持ったままドアを開ける。御堂先生はデスクに座って、マグカップを口元で傾けていた。

「御堂先生! スメラギさんのことで……って」

「あ、来たね。——待っていたよ、エレナ・ローゼンマイヤー公女殿下」

話題の人物がすでにそこにいた。スメラギさんはさっそく保健室のベッドの上に腰かけていた。

壇上で挨拶していた時のキリッとした雰囲気とは少し違って、少しリラックスした様子で足を組んでいる。夢の中の名前を学校で呼ばれると、やっぱり、なんか変な感じがする。

御堂先生がちらつとこちらを見て、苦笑した。

「早かったわね」

部屋には、すでに理人くんもいた。

窓際の椅子に座って、静かに本を読んでいる。いつもながら先回りすごい。

「理人くん、早いね」

「四時間目が自習だったからね」

涼しい顔で答える理人くん。要領がいいのか、サボり上手なのか。たぶん両方だ。

そこへまた足音。

「御堂先生、なんでスメラギさんが学校に？——つて」

私たちの後ろから、海斗も保健室に入ってきた。私、京子ちゃん、理人くん、そして最後の海斗を見て、スメラギさんが胸に手を当てて軽く頭を下げる。

「質問ありがとう、——リリアンヌ・フェルシュタット公女殿下」

「……その呼び方、現実世界ではやめてください」

海斗がぼつこの悪そうな顔をした。スメラギさんは前世の名前で呼ぶのが好きらしい。

だけど、海斗が嫌がるのも無理はない。だって海斗の前世は女の子——お嬢様なんだもんね。いつ聞いてもちよつと面白い。いや、笑つちやダメだけど。ふふ。

「まあまあ、座つて。スメラギさんは逃げないから」

御堂先生が手で部屋にある椅子を指し示す。私たちは保健室の椅子を引っ張り出して、スメラギさんの前に並んで座つた。なんだか秘密の作戦会議みたいだ。

やがて、スメラギさんが口を開いた。

「君たちにはあらためて説明するまでもないけれど、私がこの学校にやつてきたのは『南の魔女』の件があつたからだ——」

その一言で、空気が変わった。

一週間前のあの戦い。南の魔女は一度は撤退させはしたけれど、倒したわけじゃなかった。

「表向きは英語の田村先生の産休に代わる臨時の教員だ。……だが本当の理由は、さつき言つた通り」

膝の上で手を組み、スメラギさんは真剣な表情を浮かべた。

「ユメコネクトーム研究所でも、この学校を包み込む夢の力場の分析を進めているんだけど、予断を許さない状況になつているんだ」

その声は穏やかだけど、目は笑っていないかった。

「——どういふことですか？」

「力場の歪みが大きくなつている。特にこの学校周辺の数値が、四月の事件以降、ずっと高いままなんだ」

「高いまま、つて——前より悪くなつているんですか？」

私が聞くと、スメラギさんは軽く頷いた。

「そうだね。それにずいぶんと、不安定なんだ。いつ何が起きてもおかしくない。それに、『南の魔女』は、まだ倒せたわけじゃない」

短い一言だったけど、保健室の空気がひやりとした。

「あの戦いで押し返したのは確かだ。でも消えたわけじゃない。今ここで『南の魔女』が何をしているのか……それが、一番気になる。だからこの学校に入ることにしたんだ。御堂君一人に任せきりにするのも、よくないしね」

「あら、私ってそんなに信用ないのかしら？」

御堂先生がマグカップを置いて、冗談っぽく肩をすくめた。

スメラギさんは、すぐ苦笑を浮かべる。

「そういうわけじゃないさ。ただ、君だって私がいたほうが何かと都合がいいだろう。私と君では役割がちがう。私は外から支えることしかできないからね——」

スメラギさんが少し言葉を切った。

「夢の中は、——僕の領域じゃない。君と違ってね」

夢の中は僕の領域じゃないってどういうこと？

そりゃユメコネクトできるのは私たちだけだよな？

「みやこちゃん、どう思う？」

ちよつとヒソヒソ声で聞いてみる。

「うーん、大人の人がもう一人いてくれるのはありがたいんじゃないかな？ これまでだって助けてもらったし。海辺の街で会った時から、ちよつと怪しい人ではあるけど」

「——西野さん、聞こえているわよ？」

御堂先生が苦笑する。京子ちゃんは、小さく舌を出して、おどけて見せた。

京子ちゃん、真面目だけど、時々おちやめだ。

海斗はスメラギさんをじつと見ていた。何かを考えている顔だ。それから、小さく「よろしくお願います」と呟いた。理人くんも頷く。

ただ、私はあることが気になって手を挙げた。

「あの……スメラギさん。一つ聞いてもいいですか」

「うん？」

「御堂先生にも見えていたんじゃないかなって思うんですけど、前の戦い——南の魔女との戦いで、巨大な穴を閉じた時の光……あれって、なんだったんですか？」

体育館の天井に開いた巨大な穴《ランドホール》には、とてつもない魔力の渦があった。

エレナになった私は、リリアンヌとシャリフと三人で剣と錫杖に魔力を込めて——白と黒の閃光《ヴァイス・シュバルツ・リヒトヴェーラ》を放った。

それが南の魔女ミカエラ・ローエの魔法の力に押し返されそうになった時、どこからともなく現れた、あの光——「大いなる閃光《グロウサー・リヒトヴェーラ》」。

とてつもなく強く暖かな光は、私たちの閃光を包みこんで、さらなる大きな光へと変えた。どこから来たかわからないあの光は、私たちが生み出したものではなかった。去り際に、南の魔女は言った。『お前たちの「魔女」に礼を言っておけ』と。

——あの光は、なんだっただろう？

あの、まばゆい光。私たちだけの力じゃないものが、あの瞬間、確かに存在していた。

「あれ、俺もずっと気になってた」

海斗が身を乗り出した。みんなの視線がスメラギさんに集まる。

スメラギさんは——一瞬だけ、御堂先生の方を見た。

それから言う。

「……それについては、まだ調査中なんだ。わかったら、伝えるよ」

ちよつと困つたような笑顔。なんだか歯切れが悪い。スメラギさんにしては珍しい。

御堂先生はマグカップに視線を落としていて、何も言わなかった。

「まあ、ともかく」

スメラギさんがぼんと手を叩いて、空気を切り替えた。

「私はしばらくこの学校で英語を教える。何かあつたら、いつでも相談に来なさい」

「ありがとうございます！」

ちよつと待つて。スメラギさんが英語の先生、つてことは。

「あの……スメラギ先生。英語の中間テスト、私たちにこつそり教えてもらつたりとか……」

「だめに決まつてるだろ」

私が言い終わるよりも前に、海斗に突っ込まれた。

「……じよ、冗談に決まつてるじゃん！」

「お前が、言うて、冗談に聞こえないんだよ」

そりや、ワンチャンつてのはあつたけどね！

「まあまあ、夫婦漫才は、そのくらいにして」

「——そんなんじゃないから！」

また、同時に同じことを言ってしまった。よけいに京子ちゃんがまにましている。

そんな私たちに目を細めながら、御堂先生がため息をつく。

「せめて、中間テストまで、事件が起きないといいんだけどね」

その言葉に、全員が同意した。

「ただ試験前くらい、平穏な日々を過ごしたい。」

「きつと大丈夫ですよね？ さすがにテストの時くらい、魔物だって空気を読んでくれるでしよ……」

——読んでくれるよね？

私のそんな言葉に、御堂先生はマグカップを持ち上げた。スメラギさんは天井を見た。

……あれ。誰も「大丈夫」って言ってくれないの？

やがて、昼休み終了五分前を告げるチャイムが鳴った。

「あ、やべ。教室戻らないと」

海斗がはつと立ち上がる。理人くんも本を小脇に抱えて椅子からすつと腰を上げた。私も慌てて扉へ向かう。

「あれ？ みやこちゃん、行かないの？」

京子ちゃんが椅子に座ったままだった。

「ごめん、うち、ちよつと先生に聞きたいことあるから。先に行つてて」

「え、なに？ 体調悪い？」

「違う違う、ちよつとだけ。すぐ行くから」

京子ちゃんは手をひらひら振つて、笑った。

……なんだろう。まあ、京子ちゃんのことだから、何か気になることがあったのかな。小説のネタ探しかもしれないし。

「じゃあ教室でねー」

廊下に出ると、海斗はもう先を歩いていった。

③ 数学はやっぱり苦手で

初夏の光が、窓から斜めに差し込んでいる。黒板の端が金色に光つて、ほこりがきらきらと宙を漂っている。校庭からは、運動部の掛け声と、合図を鳴らす笛の音。

のどかで、穏やかな、放課後。

先生と、二人きりの教室。——どうしてこうなった！?

「結女、手が止まつてるぞお〜」

「……はいっ」

プリントの三枚目は、連立方程式。解き方は教わったし、理解した気もした。

なのに答えが合わない。先生はこの人。「〇〇してヨシ」が口癖の、和田先生だ。

京子ちゃんと帰る約束は、五時間目の小テストの赤点によって、あっさり消え去った。

三十点。赤点ラインは四十点。

見事に戻りつつ「終わるまで帰らないように」と宣告されて、補習プリントを三枚渡されたのが、三十分前のこと。

——いや、笑えない。全然笑えない。……ちよつと泣きたい。

中間テストに向けて、さいさき悪すぎ！

今回の試験範囲は「連立方程式」。連立方程式っていうのは、ヒントが二つあって、両方のヒントに当てはまる数字を見つけなさい——っていう問題。

たとえば「足したら9」「一方を2倍してからもう一方を引いたら3」の二つのヒントから

答えを出す、みたいな。

ヒントが増えたぶん手がかりも増えるはずなのに、なぜか頭の中の「？」の方が二倍になる。

「結女さん、どこまで終わった？ わからないことがあればなんでも聞くんだよ」
声に顔を上げると、和田先生が隣に立っていた。

細身で、ちよつとだけ猫背。いつもワイシャツの袖をまくって、チョークの粉が右手の親指あたりについている。メガネの奥の目はいつもニコニコしていて、怒っているのか冗談なのかわからない時があるけど、基本的には優しい先生だ。たぶん。

「あ、先生。すみません。ほんと、マジで答えが合わなくて……」

「そうか？ どれどれ？。どの問題かな？」

和田先生は私の隣の机に腰を下ろして、プリントを覗き込んだ。

そして、ちよつと困ったみたいに小さく息を吐いた。……なんかすみません。

「いいか結女さん。連立方程式っていうのは、パズルなんだ」

「パズル？」

「二つのヒントを、同時に満たす答えを探す。地図でいうと、二つの道が交わるところを見つ



数学の話をするときの和田先生は、まるで仲の良い友達のことを話すみたいに笑う。

私なんか、数学の隣で一生暮らすなんて想像しただけでめまいがするのにな。

先生はメガネを押し上げて、シャーペンを手に取った。プリントの余白に、すらすらと何か書き始めた。そんな先生を見ていると、ふと気になった。

「先生って、なんで数学が楽しいんですか？ 私、『わからない』ってなつた瞬間にもういやだーってなるんですけど」

和田先生はちよつと驚いた顔をして、シャーペンの動きを止めた。

「うーん、『わからない』から、面白いんだと思うよ。わかつた瞬間が、気持ちいいから」

「……全然びんとこないです」

「今はそれでいい。また、何回かわかつた瞬間があると、変わってくるよ」

うーん、そうだろうか。

「私は、なかなかわからないです。難しい問題とか、追試とか、楽しくないんだもん」

「やっぱわかりわるまでは難しいかもね。でも、僕は、みんなに数学を理解してもらつて、面白いつて思ってもらいたんだよ。数学はわかれば楽しいからね」

先生は苦笑した。それからシャーペンの先で、こつん、とプリントを叩いた。

「——大事なのは、わからないことにまつすぐ向き合うこと。向き合うから考える。考えるから、少しずつ見えてくるものがある。クイズとか、パズルとか、ゲームとかでそういうのつてあるでしょ？」

先生はプリントに目を戻して、一問目の解き方をゆっくり書き始めた。

「そんなもんですかね」

「そんなもんだよ。……だから本当のことを言うと、先生は試験でももつと難しい問題を作りたんだよな。みんなが目丸くするような、考えることそのものが冒険になるような——」

先生の声が、ほんの一瞬、不思議にトーンが上がった。

顔を上げると、先生の目がきらきらしている。

「本当はね、ここだけの話、中間テストでも、誰も解けないくらい難しい問題を出してみたいんだよね。みんなが十点か二十点くらいで、それでも一生懸命に向き合ってくれるみたいなの。僕はみんなの正解じゃなくて、考えた跡を見たいんだよなあ」

「やめてくださいいー！」

おもわず即答してしまう。

「そんなテスト受けたら、私、白目を剥いて倒れますから！」

先生がくつと笑った。

「冗談だよ。だけど正直な反応でヨシ！」

「正直なだけじゃなくて、本気ですからね！」

先生は笑って、「そんなことはしないから、しつかり基本問題は解けるようにしてね」と私のプリントの余白に解法のヒントを書いてくれた。いつもの和田先生だ。

数学のことはよく分からないけど——、先生が数学に向き合うのが好きだってことは、良く分かった気がした。

*

一時間ほどかかって、居残りのプリントをなんとか片付ける。

それから文芸部室にたどり着いた。結局最後は和田先生に全部ヒントをもらったんだけど。最後には「行つてヨシ」つて。和田先生はなんだかんだで優しい先生なんだと思う。

「おまたせ。まだ、みやこちゃんいる？」

部室に入ると、京子ちゃんいつもの机に座つて、待つてくれていた。机の上には本を開い

ている。いちご牛乳のストローをくわえたまま。

先に帰つちやつたかなと思つていたけれど、待つてくれる京子ちゃんはやつぱり優しい。

「はるかちゃん、おつかれさまー。長かつたね。さすが和田先生」

「いやー、勉強させていただきました」

てへへへ、と右手を頭の後ろにまわす。

「みやこちゃん、もう、帰る？」

私がそう言うと、京子ちゃんは「うん」と言つて本を鞆に入れて立ち上がった。

「あ、そうだ。——ねえ、はるかちゃん、今日寄り道してかない？」

「え、どこ？」

「商店街の奥の、あの甘味処。ほら、私がときどき行つてるところ」

「ああ、あの古い感じのお店！ あそこ、美味しいんだよね」

「うん。最近行つてなかつたから、寄りたくて」

「行く行く！ テスト前だけどおやつは別腹！」

テスト前だけど甘味処のあんこは別腹だ。ひよー、白玉！

私たちは、口の中に広がるだろう甘みを想像しながら下駄箱へと向かつた。

校舎を出て、体育館の横を通りかかると、バスケット部の練習が見えた。

コートを走る部員たちの中に海斗がいる。ドリブルからのレイアップ。ボールが綺麗な弧を描いてリングに吸い込まれていく。他の部員から「ナイツシューー！」と声上がる。

私は足を止めて、開け放たれた入口から少しだけ見ている。

海斗が部活でバスケットしているところ、なんだかんだ久しぶりに見る気がする。

球技大会のときは、大活躍だった。後輩女子からも黄色い歓声が上がっていたし。

「……がんばれ」

気づいたら、声に出していた。

小さい声だったけど、風に乗ったのか——海斗がこっちを見た。

目が合う。海斗は一瞬ぎよんととして、それから右手を上げた。

口が「おう」と動いた気がする。友達の部活を応援する。それだけのこと。なのに、胸のあたりがほんのちよつとだけ、きゅつとした。

——暑いからかな。もうすぐ六月だし。

「はるかちゃん、置いてくよー？」

「あ、待って！」

京子ちゃんが五メートルくらい先で手を振っていた。慌てて走って追いかける。

隣に並ぶと、京子ちゃんがまにまにしていた。

「なんでそんな顔してるの」

「べつにー」

「嘘でしょ。みやこちゃん、絶対なんか言いたい顔じゃん」

「きしししし。別に何も？ ただ、はるかちゃんが海斗くんに『がんばれ』って言った
なーって」

「友達だもん。普通でしょ」

「うんうん、普通普通」

全然「普通」って思っていない顔。

私は京子ちゃんの腕を掴んで、ぐいつと引つ張った。

「もう！ 早く行こ！ 白玉クリームあんみつ！」

「はいはい。あ、でもうち今日は、クリームソーダにしようかなあ。抹茶の」

「抹茶クリームソーダもいいよね。……あ、でも私はあんみつ。白玉が呼んでるし」

「白玉が呼ぶ、って何」

「耳を澄ませばわかるよ、みやこちゃん」
笑いながら、二人で商店街に向かつて歩く。
夕暮れの光が、校門の壁を温かく照らしていた。
私は体育館の方をもう一度だけ振り返った。

④ 点数バトル、成立!

「はるかちゃん、うちの卵焼き分けてあげようか」
次の日の昼休み、私は食堂にいた。食堂の一番安いうどんを食べている。
理由はシンプル。お弁当を忘れたのだ。ただ悲しい。うどんをすすする。じゅるじゅるじゅる。
向かいに座った京子ちゃんが、自分のお弁当箱から卵焼きを一つ摘まみ上げた。
京子ちゃんは食堂派じゃないけど、「はるかちゃんが食堂なら、うちも食堂で食べる」と
言っついてきてくれたのだ。ありがたい。
「ありがとう、みやこちゃん。でも、うどんで足りるから大丈夫。……大丈夫だよ」

「強がりは無用だよ。はい」
京子ちゃんは無言で卵焼きをお皿に置いて渡してくれた。優しい。
朝、玄関でローファーを履いて、ドアを開けて、「行ってきます」と言っつて——学校の校門
にたどり着いたところでお弁当を忘れたこと気づいた。取りに戻ろうかと思っただけど、もう時
間がなかった。……ドジだ。完全にドジだ。そんなわけで手持ちのお金もなく一番安い
どん。

だいたい教室でお弁当を食べるから、食堂にはあんまり来ない。でも来てみると、意外と悪
くない。

天井が高くて、大きな窓から光が入って、学年が入り混じったざわめきがある。教室とは違
う、ちよつと開放的な空気がだ。

「あれ、遙香。……西野さんも。今日は食堂なんだな」

見上げると、海斗がトレーを持って立っていた。トレーの上にはラーメンがのっている。

「海斗、食堂派だったっけ?」

「今日だけ。購買のパンが売り切れてさ」

海斗がそのまま隣の席にドスンと座った。

……いや、いいんだけどね。

海斗のラーメンから湯気が立ち上っている。唐揚げものっている。唐揚げラーメンはけっこう高いやつ。羨ましい……

お腹のすくにおいから目をそむけると、京子ちゃんがニコツと笑った。

「そういえば、さっきのスメラギ先生の英語の授業、わかった？」

「なんとびっくり、とてもよくわかりました」

「はるかちゃん、わかるのが『びっくり』じゃだめだよお」

それはそうなんだけどね。

四時間目は、初めてのスメラギさんの授業だった。ありがたいことに、授業はめちゃくちゃわかりやすかった。発音は綺麗だし、説明も丁寧だし。産休に入った田村先生にはなんだか申し訳ないけど。

隣で海斗が「あいつの授業、まあまあだよな？」ってぼそつと言ってたけど、「まあまあ」じゃなくて「すごいいい」でしょ。口には出さなかつたけど。

「遙香先輩！ 京子先輩！ 海斗先輩も！」

食堂の入り口から、声が飛んできた。

唯ちゃんだ。その隣には眞姫那ちゃんもいる。二人ともパンや飲み物を持っているから、外で食べるつもりだったのかもしれない。

手を振ると、唯ちゃんが駆け寄ってくる。その後ろから眞姫那ちゃん。

「あれ？ 唯ちゃんと眞姫那ちゃん。どうしたの？ 二人も食堂？」

「今日はちよつと外で食べようかと思って思ってたんですけど、京子先輩たちがいるなら一緒にいいです。ね、眞姫那ちゃん？」

唯ちゃんがここにこしながら椅子を引つ張ってきて、私たちの向かい——京子ちゃんの隣に座る。眞姫那ちゃんもさらにその隣に座る。

……あれ、いつもは眞姫那ちゃんの方が元気なのに、今日は元気がないみたい。



試験勉強で寝不足だったりするのかな？

いつの間にか、食堂のテーブルが文芸部の集会所になっていた。

「先輩、中間テスト、どうですか？」

唯ちゃんがお弁当の蓋を開けながら、不安そうに聞いてくる。

よく考えたら一年生にとっては、中学生になって初めての定期テストなのだ。不安はきつと、私たち二年生の比じゃないだろう。

「どうするって言われても……勉強するしかないよね」

「ですよね……」

「唯ちゃんは成績いいでしょ？ 心配いらないんじゃない？」

「いえ、数学がちよつと……」

唯ちゃんが目を伏せた。

「数学。数学かあ。」

「数学。私も数学苦手だな」

そもそも私たちは文芸部だから、全体的に国語は得意。

でも、数学は苦手、というのはあるかもしれない。

「どこかでまとめて勉強しないとまずいかもね」

お箸を置いて、両肘を突く。唯ちゃんがそんな私に目を丸くしてうったえる。

「遙香先輩、勉強教えてくださいよ」

「いやいや、私も苦手だってば」

「でも、先輩、一年生の範囲ならわかりますよね？」

「まあ、そりゃ、そうだけど……。多分」

それすら怪しいかもしれない。うーん、やばい。

その時、京子ちゃんがいいことを思いついたとばかりに、ぱんつと両手を合わせた。

「ねえ、それじゃあ、みんなでお泊まり勉強会しない？」

いちご牛乳のパックをテーブルに置いて、みんなを見回す。

「テスト前にさ、みんなが集まって一緒に勉強するの。得意なところは教え合って、苦手なところは一緒に悩んで」

おお、それは、なんと、素晴らしいアイデア！

「あ、それいいですね！——ね、真姫那ちゃん」

唯ちゃんが目を輝かせた。隣で真姫那ちゃんがようやく元気な声になった。

「あ、はい。先輩たちと一緒に勉強できるなんて楽しそうですし、先輩方に教えてもらえるの
ありがたいです」

眞姫那ちゃんの反応に唯ちゃんもうんうんと頷く。

「でも、どこでやるの？」

私がそう聞いた瞬間、なぜか全員の視線が私に集まった。

「……え？　なんで私を見るの？　……ぶ、部長だから？」

「うん。それに、はるかちゃんち、リビング広いじゃん」

「えつ、うち!？」

京子ちゃんがにこにこしながら言った。「え？　そうなんですか？」と一年生二人。

「確かに、小学校の時、遊びに集まっていたのも遙香んちだったな」

海斗が唐揚げラーメンをすすりながら言った。

おい、お前が勝手に決めるんじゃない。

「お母さん優しいし、お菓子いっぱい出してくれるし」

京子ちゃんがたたみかける。

「いや、まあ……たしかにリビングは広いけど」

「じゃあ決まりだね」

「決まっちゃった!？」

ちよつと待って！　帰ったらお母さんに聞かないと！

……でもお母さんのことだから、「いいわよー、楽しそうじゃない」って言いそうな気がする。そういう人なのだ、うちのお母さんは。

——お泊まり勉強会かあ。

ちよつとドキドキした。自分の家でお泊まり会ってなんだか照れくさい。テスト勉強のためだつてわかっているけど、みんながうちに来てくれるつて時点でなんだか特別な感じがする。

私はこくつと頷いた。

「いいね、やろうよ!」

「やったー!」

唯ちゃんが嬉しそうに両手を上げる。その横で京子ちゃんはさらつと言った。

「ねえ、海斗くんも来ない？　海辺の街の合宿も一緒にしたし。みんなで勉強した方が楽しいし」

でもその目が、なんだか意味ありげに笑っている。

「海斗先輩も来てくれるんですか!」
唯ちゃんがきらきらした目で乗った。

海斗がうちに泊まりに来る。なんだろう。さっきまでの「みんなで勉強会なんて、楽しみ!」のドキドキとは、ちよつとだけ違う何かが胸の奥でざわつとした。

「どう? 海斗くん? はるかちゃんの家でお泊まり会」

海斗はラーメンの丼から顔を上げて、ちよつと固まった。

「お、……おう?」

「勉強会! お泊まり勉強会やるんだけど、海斗くんも来なよ」

「俺は別に——」

海斗が一瞬だけ、ちらつとこつちを見た気がした。

でもすぐにラーメンに視線を戻して、ぼそつと言った。

「……まあ、行けたら行く」

「やった!」

京子ちゃんが両手を上げて喜ぶ。「行けたら行く」は、海斗の場合は「行く」だと思ふ。たぶん。

「ちなみに理人くんも誘おうと思ってるんだけど」

京子ちゃんがスマホを操作しながらさらつと言った瞬間、海斗が顔をあげた。

今度は明確に顔が歪んでいる。

「なっ! ……あいつも来んのかよ」

「文芸部だし」

海斗が鼻から短く息を吐いた。

何か言いたそうだけど、何も言わず、ラーメンを一口すすって、黙った。

海斗と理人くんって、なんだか不思議な距離がある。仲が良いのか悪いのか。前世でも今世でも、この二人の関係性は私にはよく理解できない。

「理人くんも来ることになったよ」

しばらくの間、スマホをいじっていた京子ちゃんが、その画面を見せてきた。

文芸部のグループチャットだ。

「みやこ…お泊まり勉強会やるよー! 逢香ちゃんの家で! 理人くんも参加できるっ」

「理人…参加できます。何か持っていくものはあるかな?」

送信してから返信まで、一分かかってない。理人くん、早すぎない？

「……勝手にしろ」

海斗がラーメンのスープを飲み干した。なんだか、ちよつとだけ不機嫌そうに。

京子ちゃんがいちご牛乳の残りをちゅーつと飲み干して、空のパックをテーブルに置いた。それから——何かを思いついたみたいに、「あ、そうだ！」と言って、ほんと手を叩いた。

「ねえ、せつかくだからさ」

京子ちゃんが目を輝かせる。いたずらを思いついた子供みたいな顔だ。

「はるかちゃんと海斗くん、テストの合計点で勝負してみたら？」

「——はいっし」

私と海斗の声が揃った。

「だって二人とも成績おなじくらいでしょ？ ちよつどいいじゃん。どっちが上か決めようよ。いつもみたいに張り合ったら競争になつて、勉強も捗るんじゃない？」

「いや、なんでそうなるの」

「勝った方が負けた方に——なんかしてもらえる、とかにしたら、やる気出るでしょ？」

京子ちゃんがにっこり笑った。

——なにかしてもらえる？ ごほうび的な？

ちらつと海斗を見たら、海斗もこつちを見ていた。

その海斗の目がなんだか、いつもと違った。ふざけてる感じじゃない。真剣、つてほどでもないけど、なんだか、じつと私を見つめている目。

心臓がどくんと鳴った。

——いやなんで。なんでドキッとしているの私。テストの勝負でしょ？ つていうか海斗と私って成績どっちが上なんだっけ。科目によるよね。英語は私の方がちよつと上で、数学は海斗の方が——いや、どっちも微妙か。どっちも微妙つて、それはそれで問題だな。

「……やるか」

海斗がぼそつと言った。

「え」

「勝負。やってもいいぞ」

腕を組んで、ちよつとだけ顎を上げる。むむむ。海斗が挑発的な態度を取ると、こつちの負けず嫌いのスイッチが入ってしまうのだ。これは小さい時からずっとそう。

「——いいよ。じゃあ、受けて立つわ」

「言ったな」

「言ったよ。ぜったい負けないから」

「面白え。泣いても知らねーぞ」

「泣くのはそつちでしょ」

「おぉー」

眞姫那ちゃんと唯ちゃんが拍手した。

お互い一步も引かない。いつもの、いつもの感じだ。パチパチ火花が散るような、どつちも折れない感じ。竜虎相搏つてやつ？

——のに、なんだろう。

海斗の目が、いつもよりちよつとだけ真剣な目でまっすぐこつちを見る気がして、心臓が変な跳ね方をした。気のせいだと思うけど。

京子ちゃんは頬杖をついて、にまにまにま

ま。自分で仕掛けておいて、この顔である。

「何かしてもらってるって、具体的に何にするの？」

私が聞くと、海斗がちよつと考えるような顔をした。それから——

「……勝つてから決める」

「えー、ずるくない？ 先に言つてよ」

「いいだろ、別に」

海斗がふいつと横を向いた。耳が、ほんのちよつとだけ赤い——ような気がしたけど、まあ食堂は暑いしね。

「それじゃ、私も、後からにしよう」と

京子ちゃんがにやにやしている。もう、ほんとになんだっていうんだろう。

——そういうえば球技大会でも、勝つたら何かって言っていた気がするけど、……なんだったかな？

「なんだか楽しそうだね」

涼やかな声があった。見ると、理人くんがそばに立っていた。

「勝負の話が、聞こえたんだけど」

